

「 commonspace・SOHO・カフェが広がる新しい暮らし方」

西国分寺の集合住宅 マージュ西国分寺

設計 谷内田章夫 / ワークショップ

施工 丸善建設工業

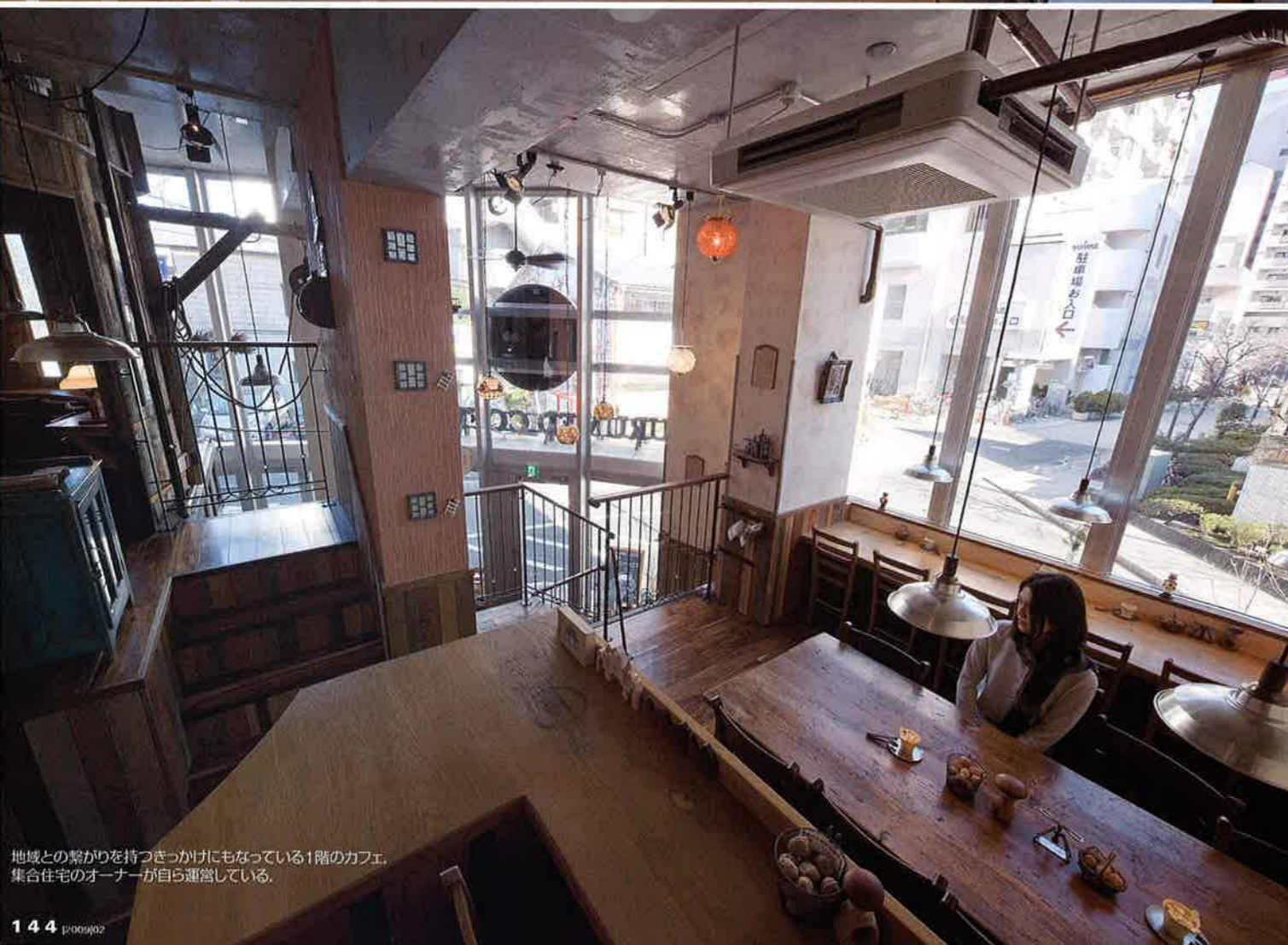
所在地 東京都国分寺市

NISHIKOKUBUNJI APARTMENT

architects: AKIO YACHIDA WORKSHOP



入居者が自由に使える、4階に設けられたコモンダイニング。居室に洗濯機置場を設けておらず、入居者はここで共用の洗濯機を利用する。



地域との繋がりを持つきっかけにもなっている1階のカフェ。集合住宅のオーナーが自ら運営している。

小さな集合住宅での新たな試み

小さな規模でありながら、コレクティブハウスのような暮らしができる集合住宅である。駅前の184m²の土地に8人の家族が長年暮らしていた場所である。現在はそれぞれが独立して、別の場所で家族形態をとっている。その家族の精神的なシンボルとして仮想の「いえ」をつかった。家族の「時」と「場」を繋ぐ関係拠点として、「いえ」は分解され、スペース容量が増やされ、クラスター (= 家族) を形成する6階建ての集合住宅となった。

19~80m²の9戸のユニットを、眺望のよいテラス付きのコモンダイニングを中心に上下階に配列した。20m²前後の自立したコンパクトな住戸が4ユニット、個室が2つあり、キッチン・バス・トイレを生活補完機能のコモンとして使えば、2名のシェアードハウスになる住戸が3ユニット、同様のシェアードハウスになるメゾネットが2ユニットの構成である。1階には街に開いた店舗、シェアスタイルのSOHOを設け、規模は小さいが、住居部分とは別に、街に融合する機能を取り入れた構えとなっている。一般的に、コレクティブハウスは住戸面積の10~15%程度をコモンとして供出し、主としてコモンミールなどにより家事低減を目指した共同体的な生活空間となるが、現在の日本の都市においては、社会保障制度が充実している北欧などに比べて、運営を含め、超えなければならないハードルが多く、また高い。しかし、ここでは専有面積に対してコモンの割合は5%程度である。共有空間を、外部を含め、効率的につくり、共有単位を見きわめ、利用頻度が高くなるようにすれば、小さな賃貸集合住宅でもそのメリットを享受するのも容易となるのではないかと。(谷内田章夫)



配置 縮尺1/4,000

東より見る。4階のルーパバルコニーはコモンダイニングと繋がった共有空間。菜園で育てる野菜の種類など、入居者が話し合って決めている。



コモンダイニング。面積は24.62m²。月に一度、ここで入居者の定例会が行われている。オーディオ機器は入居者が持ち寄ったもの。またダイニングテーブルは入居者が買い出しツアーで購入したもの。賃貸住宅の入居者のほか、SOHOの入居者、カフェのスタッフも利用する。



座談会：「暮らし方」による住居選択の可能性

影山知明 (「マージュ国分寺」オーナー) × 甲斐徹郎 (チームネット) × 谷内田章夫 (建築家)

時間や地域との繋がりを継続していくこと

—影山さんは「マージュ国分寺」のオーナーでもあり、さまざまな試みを実行していく立場でもあります。このプロジェクトが始まったきっかけは何だったのですか？

影山知明 (以下、影山) もともと、この敷地には母方の家である木造の一軒家が建っていました。2005年に空き家になりましたが、私が生まれ育った場所でもあり、思い入れがある土地です。コインパーキングやありきたりのワンルームマンションに留めたくないという思いは持っていました。

—影山さんはコレクティブ住宅などの住まい方にもともと関心をお持ちだったのですか？

影山 私の現在の考え方の原型に、東京都西東京市にある、生活クラブ生協が主体となってつくった「バスレル保谷」という建物があります。1階は生協の店舗と保育施設、2階は地域で活動されている方の事務所スペース、3・4階は分譲集合住宅となっています。当時、私は事業主体のひとつであった生活科学運営という組織の中で企画に関わっていました。そこで、単に住むという機能だけでなく、お店やオフィスという機能が加わると、人間関係の対角線が増えることに気付いたのです。居住者同士の人間関係だけでなく、小さい子どもとそこで働く大人、お店を利用する地域の人というように世代や立場を超えて関係が生まれ、出会い方も多様になってきます。そこで見たことを、今回のプロジェクトにフィードバックしたいと思っていました。

5、6階のメゾネットとなっているGタイプ下階。専有面積は最も広く下階が32.38㎡、上階が28.92㎡。



—それで賃貸住居、コモンドライニング、SOHO、カフェという組み合わせが出てきたのですね。

影山 そうです。以前からこの一帯に「森」を取り戻したいという思いを持っていました。国分寺界隈は今でも武蔵野の緑が広がっていますが、幼い頃そこで遊んだ記憶が自分の原体験の中にあるのです。そのテーマと住まいづくりを結び付けることを探索している中で甲斐さんと出会い、相談をしていくことになりました。

甲斐徹郎 (以下、甲斐) もともとコレクティブハウジングありきで話を始めたのではありませんでした。結果的に、大きく言えば住居部分はコレクティブハウジングに近いものになっていますが、そういった既存のスタイルにこだわらず、自由に意見を出し合うところからスタートしました。

影山さんから話をいただいて、まずはこれまでに自分が関わったり、携わってきた環境共生型のコーポラティブ住宅をこの敷地に当てはめてみました。ところが、この敷地の面積はおよそ184㎡ですが、規模がまったく合わない。環境共生型を前提とすると敷地面積は800～1,000㎡必要となるため、今までは異なるアプローチで考える必要があったのです。また、影山さんから「森」というキーワードが挙がりましたが、もちろんこの敷地に森そのものはつくれない。僕はその言葉の裏側にある意味を年月の中で「育っていくもの」と捉え、地域との繋がりをどう残していくのか、土地の歴史とこれからの時間をどう繋いでいくのか、ということを考えていきました。

1階のSOHO。3室設けられており、コピーや打ち合わせのスペース、ミニキッチンが共有となっている。



今回だけでなく、これまでに関わってきたプロジェクトも、いつも地主さんとの出会いからスタートしています。多くは先祖代々受け継がれてきた土地で、屋敷林を有しているものもある。土地の持つ意味が大きいんですね。だからこそ、相続問題などで土地活用を考えなければならなくなった時に、土地の歴史をないがしろにして開発を行ったり、切り売りしてしまうことには疑問を感じています。単に敷地面積や最大容積から収支をはじいて事業計画を立てるのではなく、新たに吹き込む要素によって過去と未来を連続させ、どう変化させていくのか？それが地主さんにとって重要なことだと考えています。ここを拠点に多くの個性豊かな人たちとの関係を育てることが、場所のポテンシャルを高めていくのではないかと考えたのです。

地域と繋がるカフェ

—そこで1階にカフェが設けられているのですか。

甲斐 そうです。地域の人たちと出会う場所として、カフェは必要だという考えは初期の段階からありました。当初、カフェはテナントとして誘致するものだと思っていましたが、カフェの専門家にヒアリングする中で、われわれのような理念を実現するための役割を期待するのであれば自分で運営すべきだと分かり、影山さんが自分で運営していくことになりました。

集合住宅に限らず、建築をつくる時は地域とどう関わっていくのかというテーマが常にあると思います。たとえば外から持ってきてポンとつくってしまうのと、その土地に根を張って自分で育て上げるやり方では、周囲の受け止め方はまったく異なると思います。「ああ、あの影山さんのところの息子さん経営してるの」という状況をつくるのが大切でしょうね。

影山 カフェの名前は「クルミドコーヒー」と言いますが、カフェを立ち上げた時も、一口5万円の「クルミド債」を発行して小口の出資者を募りました。出資者になってくれた人には、ここに入居者もいらしゃいます。出資者にはコインが配られ、それを見せるとコーヒーが無料になるなどの優待を受けることができます。

カフェを始めてよかったのは、ここから新しいコミュニケーションが起きていることです。たとえば年輩のひとり暮らしの方は将来に対して不安感を必ず持っているものだと思いますが、カフェの存在によって、ここで若い知り合いができたり、ここに来れば自分の顔と名前を分かっている人がいる。それは心強いことだと思うのです。

さりげなく、自然と顔を合わせるコモンドライニング

—この集合住宅は一部を除いて住戸内に洗濯機置場がなく、コモンドライニングに共用の洗濯機が2台設置されています。ここで入居者同士が顔を合わせる機会が必然的に生まれますが、このアイデアはどのように出てきたのですか？

甲斐 洗濯機は常時使用するものではないけれど、定期的に必ず使うものですね。個々の部屋になくてもそれほど不便を感じるものではないし、部屋の外に出してしまえば専有部は広く使えることになりました。

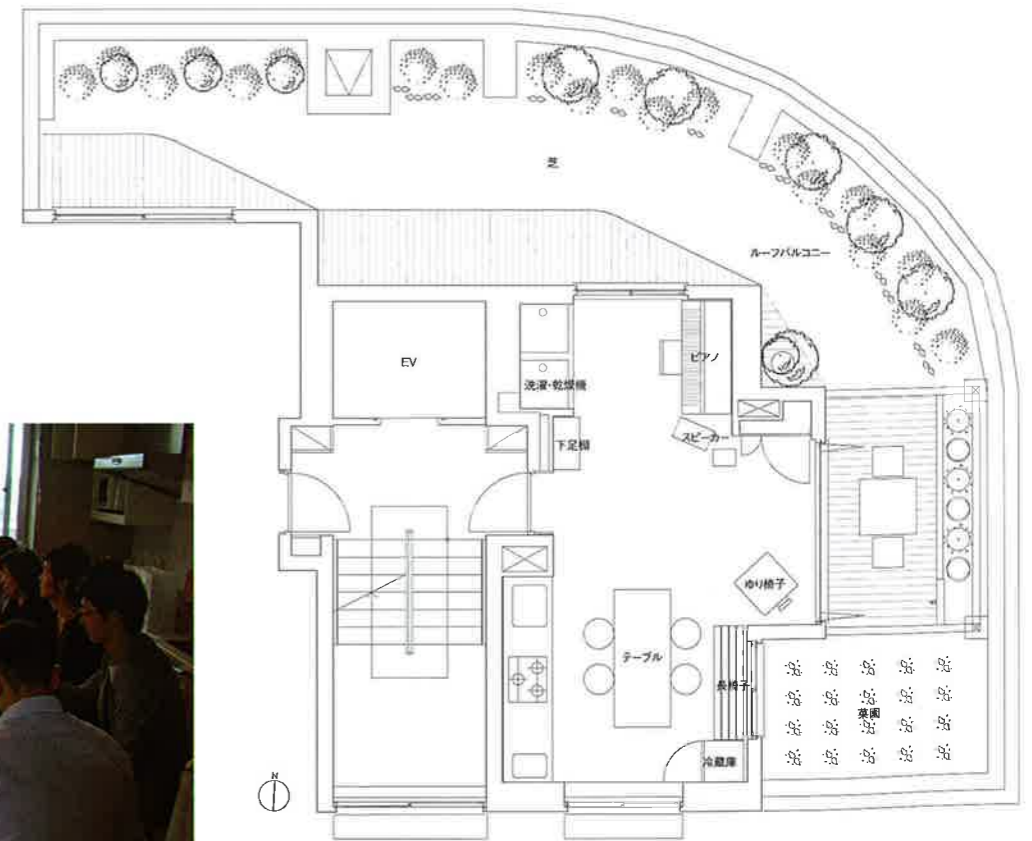
このアイデアは、過去のプロジェクトで知り合った方の中から、われわれが想定する入居者層に近い方を集めてヒアリングをしたことから生まれました。プライベートな空間から追い出せるもの、追い出して豊かになるものは何かあるかとディスカッションしていきました。バスルームは本当に各住戸内に必要？シャワーだけでもいいのでは？とか、バスルームを部屋から追い出して最上階に展望風呂をつくらどうか？といった意見も出ました。そして、結果的に洗濯機を追い出すという案が残ったのです。

谷内田章夫 (以下、谷内田) そのヒアリングには私も参加しましたが、お風呂は自分の家でゆっくり入りたいから必要だとか、生の声をいろいろ聞くことができました。さらに、それでは何かを共用するとした場合、維持管理をどうするかとか、素朴で現実的な疑問がどんどん挙がっていましたね。

甲斐 そうですね。それからおよそプランがまとまった段階で、次へのステップとしてモニター調査をしました。モニターは僕が教えている大学生や、その友人から口コミで集めました。学生が数名と、20代、30代で会社勤めをしている独身の人たちを中心に、約7割が女性です。また影山さんが理事でもある。



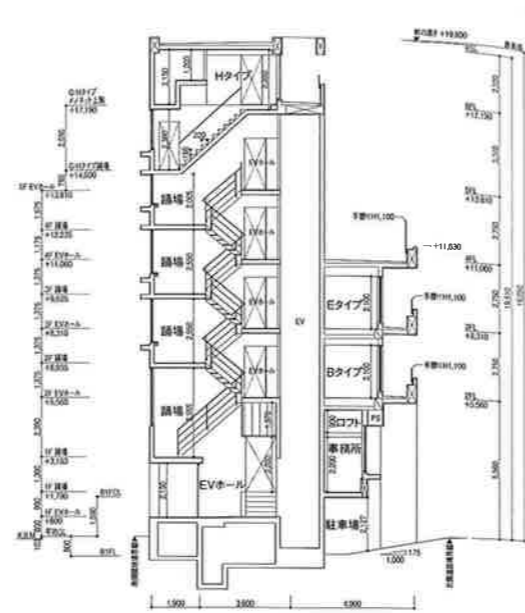
入居者による定例会議の様子。



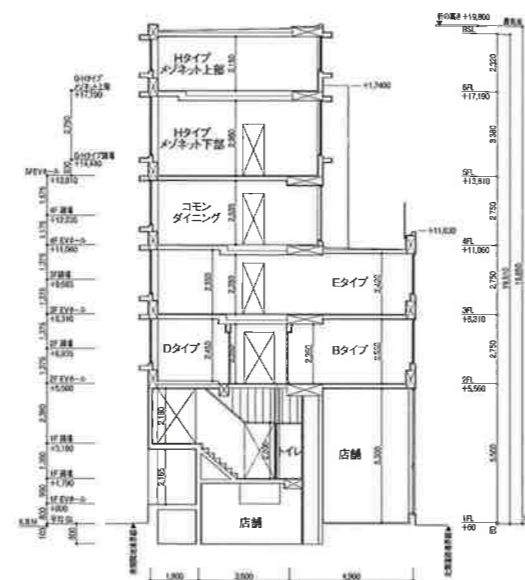
コモンドライニング平面詳細 縮尺1/100



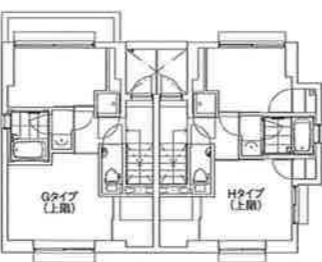
コモンダイニングのキッチン。シンクはカウンターの両側に設けられている。コンロは中央に3口のものが1基。



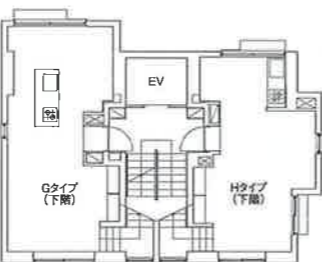
断面



断面 縮尺1/300



6階平面 縮尺1/250



5階平面

コレクティブハウジング社が運営している「松陰 commons」の入居者にも10人近く協力してもらいました。

谷内田 その時は家賃の話とか、事業としてのリアリティの検証も行いましたから、幅広い問いかけをしました。

—その後、実際の入居者はどのように募集したのですか？

谷内田 このプロジェクトができる直前に、国分寺界隈の町歩きなどのイベントを行ったそうですね。

影山 竣工が2008年6月、本格的な入居開始が9月頃でしたが、3月からおよそ月に2~3回のペースでワークショップを行いました。コンセプト説明会と国分寺を紹介をする町歩きイベントを組み合わせ、入居を検討している人が入居前からいろいろな人と出会う機会をつくったのです。継続した関係を築くためには、入居前のなるべく早い段階からコミュニケーションを取る必要があると考えていました。具体的にどの程度の効果があったのか分かりませんが、結果的に3月、4月のワークショップを経験していない入居者は14人中3人だけです。コンセプトを理解しながら、こんな雰囲気の人たちと一緒に住んでいくんだ、という共有体験を重ねていく中で、ここに住もうと決心した人もいました。ただし、一方で建物が形になって姿を現さないと生活のイメージはわからないという人もいました。

甲斐 結果的に、町中にある不動産屋の紹介で入居した人は今のところひとりもいません。今回分かったのは、われわれもすべての不動産屋にコンセプトを理解してもらうことは不可能ですし、不動産屋もコンセプト的なことをお客さんに伝えることなどできないということです。そこで、独自の視点で不動産を紹介しているホームページ「東京R不動産」で募集窓口を開いてもらい、そこからわれわれチームネットのホームページへジャンプしてもらって、コンセプトを伝えるようにしました。結果「東京R不動産」から入居が決まった方が最も多く4名になりました。その他は直接チームネットのホームページを見た方や口コミで決まった方などですね。現在の入居者の方はほとんどが単身で男性6名、女性8名です。世代は20代~60代と幅広く、子どものいるファミリーも1世帯いて、世代のバランスも取れているのではないかと思います。

—入居者の方は具体的にコモンダイニングをどう使っているのですか？

影山 洗濯機の利用は多いですね。また月に1回、入居者の定例会議を行っています。それに絡めてパーティをやることもあります。ただし今のところ、普段の生活の中で目的なくフラッと来てつるぐという使い方をされている人はあまりないかもしれません。ギター練習をされている方もいますが、ひとりでここに来て作業をするという状況があってもいいと思っています。利用頻度で言えば1階のカフェのスタッフが多いですね。ここで豚いを食べたり、休憩所として利用しています。また1階にSOHOも3室ありますが、ミニキッチンしかないのでコモンダイニングで料理をされている方もいます。

—キッチンにはシンクがふたつあり、両端に配置されていますね。

甲斐 複数の人が、それぞれ同時に料理をつくるという状況をつくりたかつ



共有のソファが置かれた階段室。

たのです。ひとりの入居者が日常的に専有するのではない状況が大切だと考えています。シンクがひとつだと、先行して使っている人も後から使おうとする人もお互いに気を遣ってしまう。ガスコンロは3口あるので1基でも共用できています。

自分の部屋にもコンパクトなキッチンがありますが、ここに食材を持ち込んだ方が伸びやかに料理ができます。時にはお互いに食材やつくったものを分け合ったり、食事をしながら会話をしていく中で、自然発生的に情報交換もできる。天気がよければ屋上庭園に出て食べても気持ちがいいですよ。

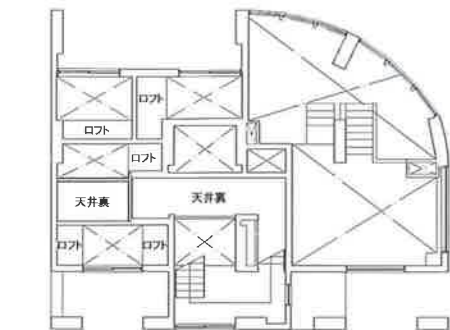
みんなで使うものではなく「みんなが使うもの」

—コモンダイニングに置いてある備品類は誰が用意したのですか？

影山 コモンに置いてあるスピーカーなどは入居者が持ち寄ったものです。食器やグラスは各自が所有しているものですが、コモンダイニングの食器棚に置いたものに関しては共有してよいことになっています。大きなダイニングテーブルはIKEAへの買い出しツアーを企画して購入しました。

谷内田 今は9世帯、合計14人なので、すぐに顔を覚えらるる規模だし、普通の声の大きさで話し合いもできます。この規模からサッカーチームのミーティングのような雰囲気が生まれていると感じました。

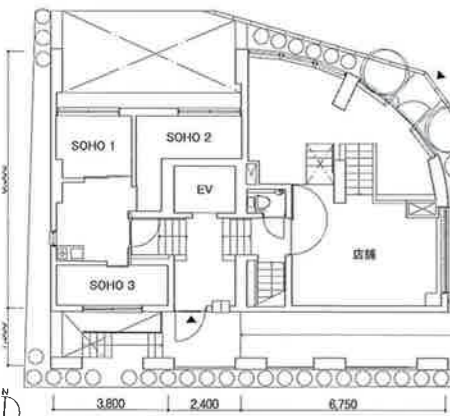
いわゆる本来的な意味でのコレクティブハウジングだと、コモンの部分はもっと充実していて、日常生活の中にしっかりと組み込まれている。食事はみんなでコモンミールをとったり、イベントが頻繁に開催されます。ここではそこまで濃密なプログラムはないけれど、自発的な部分から、一体感を感じ取っているよ



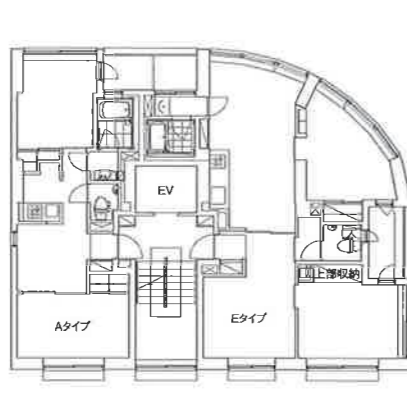
1階ロフト平面



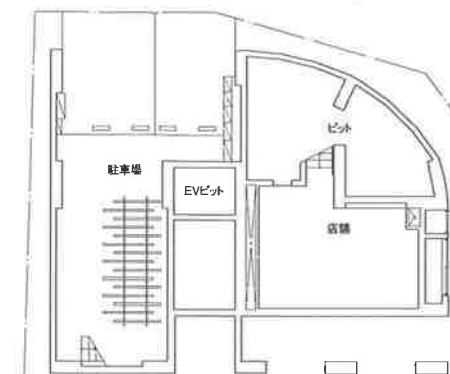
4階ロフト平面



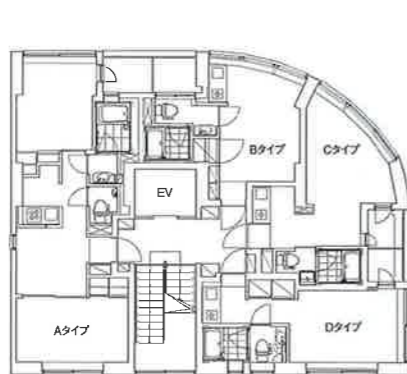
1階平面 縮尺1/250



3階平面 縮尺1/250



地下1階平面



2階平面



入居を検討している人たちに向けて行われたコンセプト説明会。*



入居を検討している人たちとの国分寺界隈の町歩き。*



共用部の使い方などを考えるワークショップの様子。*



東の駅前方向より見る。



SOHOの室内より共有部を見る。

うな気がします。

影山 こうしてみんなで暮らしていくと、いろいろなハプニングが起こります。コモンダイニングの冷蔵庫に食材を入れたまま忘れてしまったり、あるいは、コモンのキッチンから出た生ゴミをどうやって片付けるのかといった問題もありました。

また友人を呼んでパーティをしている時の騒音など、通常の集合住宅でも起こるような問題も生じます。こういったケースでは、通常のマンションであれば誰にも相談できず内側に抱え込んでしまいか、あるいは当事者同士ではなく管理会社か間に入って間接的なやりとりが行われることになると思います。でも、ここでは顔と名前が分かる距離の中で生活をしているから、問題提起をして、みんなで話し合っ決めていくというムードができつつあります。

——具体的な取り決めはあるのですか？

影山 最低限の取り決めはありますが、基本的にはそれぞれの常識に判断をお任せしています。それぞれの関わり方の距離感、物事の決め方は、付き合いの中で自然と決まってくものだと思います。ルールを決める時は、私が与えるのではなく、みんなで話し合っ決めてしまおうということにしています。

甲斐 コモンの使い方の位置付けは、みんなで使うものではなく「みんなが使うもの」として考えています。これはとても重要なニュアンスです。ここでは、みんなで一斉にコモンミールをとるといような決まりごとは極力つくっていません。共同生活の場という位置付けではなく、個室にいるよりもここにいた方が気持ちがいいという、個人の生活領域を拡張した場所として考えています。そんな場所でたまたま鉢合わせして一緒に食事をする、という程度の関係が心地よいのではないかと考えています。

「権利者と管理者」ではない関係性

——ところでここ数年、都心部ではコンシェルジュが常駐していたり、最上階にバーやプールが併設されたホテルのような高層マンションもつくられています。ここはどのようなあり方と大きく違いますね。

谷内田 現実的な問題として規模の違いがあるでしょう。スケールが大きくなれば、たとえばそのうちの2%を捻出すれば、付加価値としてある程度のサービスを用意できます。でも、そういった付加価値とされる部分がどこまで居住者の身近な生活に意味を持つかと言えば、疑問に思うこともあります。なぜなら、スケールが大きくなるほど居住者同士と一緒に使うものという意識が希薄

になるからです。それでは町中の施設と何ら変わらなくなり、単に近くて安いという程度の意味しか持たなくなってしまうのです。

甲斐 お金を払って施設を利用することは「権利者と管理者」の関係の上に成り立ちます。つまり入居者は「お客様」という位置付けになるのです。すると、管理者は権利者にきちんとしたサービスを提供しないといけない。当然その分コストがかかってしまうから、ある程度の規模が必要になるし、ビジネス的な要素が入ってきます。こうした小さな規模ではとても同じことはできません。

またこの関係上では、管理者は権利者の要求をすべて満たさなければならぬ。すると今度はクレーム対応という問題も出てくる。だから「ここまではできるけれどここからはできない」という厳密なルールが敷設されてしまうのです。つまり権利者は管理者が制限したサービスの範囲内でしか楽しめないということになります。

この集合住宅では、「管理者と権利者」ではなく「管理者と責任を全うしている主体」という関係になります。責任を果たしている人は自由にやって構わないということになるから、あれこれ制限される領域もなくなって、大らかな環境をつくりやすくなる。管理は自主管理に近くなるから、余分な費用はかからずコスト的にも有利になります。それに自主管理の行為自体に意味を見出せば人間関係も増えていく。それ自体が意味を持つようになるのです。

谷内田 だからといって、ここでは押しつけがましくない、絡みすぎない関係ができていますね。

立地や利便性でなく、暮らし方から住居を選ぶこと

——甲斐さんはこれまで「経堂の杜」（設計：大村龍一／邑設計工房 他、東京都世田谷区、2000年、『新建築住宅特集』0007）、「樺ハウス」（設計：HAN環境・建築設計事務所、同、2003年）など環境共生型コーポラティブ住宅の企画・コーディネートに携わっています。それらは分譲住宅が多いと思いますが、今回は賃貸住宅です。何か違いはありましたか？

甲斐 賃貸集合住宅の企画に関わるのは今回が初めてでした。賃貸と分譲では、当然所有の形態は異なります。分譲だと時間をかけて住みこなししていく「資産」という重たい選択になるから、入居者側は覚悟のレベルが大きい。だから供給者側も、どうしても保守的になってしまうのです。

一方、賃貸の場合は、入居者も「お試し的」にそこでの暮らしを体験することもできるし、人生のある時間だけこんな生活を楽しむという借り方でもできるので、それゆえ、賃貸の方が新しいことにチャレンジしやすい上に、関係性は常に更新され、よりエキセントリックにもなり得ます。きちんとビジョンを持った

オーナーがいれば、そのオーナーがコンセプトや具体的な住まい方などをつくり込んでいき、その考え方に共感できる人たちに住んでもらえばいいのです。

——昨年は谷内田さんが設計した「上井草の集合住宅 モダ・ビエント杉並柿ノ木」（本誌0808）が竣工しました。これは谷内田さんにとって初めての分譲集合住宅ですね。設計者として、分譲と賃貸で意識の上で違いはあるのですか？

谷内田 僕にとってほとんど違いはありません。そもそも集合住宅の歴史を遡れば、分譲も賃貸も内容に大きな差はなかったと思われます。ただし賃貸の場合は小規模な計画も多いですね。そこでは設計者として地主さんの夢をかかえてあげたいという側面もあるし、分譲と比べれば設計者としてさまざまなことにチャレンジしやすい状況もある。そのようなことから、現在のような若い建築家が厳しい条件に果敢にチャレンジするという流れが出てきたのだらうと思います。

分譲住宅はリスクが高いという理由で、どうしても保守的になってしまいがちですが、僕は分譲でも新たな展開の可能性はあるはずだと期待を持っていました。そのような中で甲斐さんと取り組んだのが「上井草の集合住宅 モダ・ビエント杉並柿ノ木」です。甲斐さんは分譲を、僕は賃貸を数多くやってきましたから、それぞれの持ち味を生かして新しいことを模索しました。賃貸・分譲という考え方を超えて、集合住宅でできることは何かを考えたと一つの結果と言えるでしょう。

甲斐 それは今回も同じですね。ただ漫然とコモンがあればいいというわけではなく、いろいろな組み合わせが重層化することで、ほかにない関係性をつくり出していると思います。

谷内田 シェアハウスやゲストハウスという事例はありますが、限られた小さな敷地の中に1階にカフェとSOHOを設けて、各戸が完全に独立しながらコモンが設けられた集合住宅はあまりないでしょうね。もっと広くないと事業が成り立たないというイメージがあっただけに、この機能の配置や使い方に、とても可能性を感じています。このプロジェクトを、単にビジネスモデルの提案では

所在地	東京都国分寺市	3,800mm×4,900mm	
主要用途	共同住宅 事務所 店舗	敷地条件	
建主	マクスルーツ／影山知明	地域地区	近隣商業地域
企画	チームネット 担当／甲斐徹郎	準防火地域	第三種高度地区
設計		道路幅員	北6.50m 東6.44m
建築・監理	谷内田章夫／ワークショップ	駐車台数	2台
担当／谷内田章夫 木野戸恵		構造	
構造	池田建築設計事務所	主体構造	鉄筋コンクリート造
担当／池田峻 二原和広		杭・基礎	杭基礎(場所打ちコンクリート杭)
設備	ymo	設備	
担当／山田浩幸 中田千尋 河東恵		空調設備	
外構・造園設計	東邦レオ	空調方式	空冷ヒートポンプエアコン
施工			温水式床暖房
建築	丸善建設工業 担当／小鉢真造	熱源	電気 ガス
空調	衛生 吉田設備	衛生設備	
電気	羽鳥電気商会	給水	増圧直結給水方式
規模		給湯	個別方式(ガス瞬間湯沸器)
敷地面積	184.12m ²	排水	汚水雑排水合流方式(公共下水道接続)
建築面積	126.95m ²	電気設備	
延床面積	622.87m ²	受電方式	低圧2条引き込み方式
地下1階	83.14m ²	設備容量	1φ3W 100V/200V 45kVA×2 3φ3W 200V 25kVA
1階	93.37m ² / 2階 122.31m ²	契約電力	店舗：20kW 事務所：4kW
3階	119.06m ² / 4階 70.64m ²	居室	8kW/6kW
5階	68.92m ² / 6階 65.43m ²	防災設備	
建蔽率	68.95% (許容：100%)	消火 消火器	
容積率	278.67% (許容：300%)	排煙 自然排煙	
階数	地下1階 地上6階	その他	自動火災報知設備 非常照明設備
寸法		昇降機	乗用エレベータ(機械室レス式 6人 乗り45m/min)×1台
最高高	19,800mm / 軒高 19,850mm	工程	
階高	1階：5,500mm 3,770mm 2～5階 2,750mm	設計期間	2006年3月～2007年6月
天井高	1階：5,300mm 3,570mm	施工期間	2007年6月～2008年5月
基準階	2,550mm 2,350mm	外部仕上げ	
主なスパン	3,800mm×3,600mm		

なく「暮らし方の選択肢の試み」と捉えることによって、いろいろな可能性が考えられるはずで。

この集合住宅の入居者が一般の賃貸住宅の場合と大きく異なるのは、この地域の家賃相場や駅からの所要時間、利便性などの条件ではなく「こういう暮らしがしたい」という理由で選んだ人が多いことですね。場所ではなく、暮らし方で住まいを選択するというスタイルは可能性を持っているように思います。

(2008年12月16日、「マージュ西国分寺」コモンダイニングにて 文責：本誌編集部)



上：「経堂の杜」（『新建築住宅特集』0007）。**
下：「上井草の集合住宅 モダ・ビエント杉並柿ノ木」（本誌0808）。**

屋根	塩化ビニルシート防水断熱工法
外壁	コンクリート打ち放しの上撥水剤塗布 裏打ちガルバリウム鋼板 t=25mm (外断熱)
開口部	アルミサッシ
外構	コンクリート金ゴテ押さえ
内部仕上げ	
共用廊下	
床	長尺リリウムシート
壁	コンクリート打ち放し
天井	コンクリート打ち放し 珪酸カルシウム板 t=6mm EP (白)
居室	
床	フローリング t=12mm 長尺リリウムシート
壁	コンクリート打ち放し PB t=12.5mmの上シナ塗装合板 目透し張り
天井	PB t=9mm EP (白)
SOHO	
床	長尺リリウムシート
壁	コンクリート打ち放し PB t=12.5mmの上シナ塗装合板 目透し張り
天井	コンクリート打ち放し
撮影	本誌写真部 浅田美浩 *提供：チームネット **撮影：本誌写真部

谷内田章夫 (やちだ・あきお)



1951年新潟県生まれ／1975年横浜国立大学建築学科卒業／1978年東京大学大学院建築学専門修士課程修了／同年、北山恒、木下道郎と共同でワークショップ設立(代表取締役：共同)／1995年谷内田章夫／ワークショップ設立／2002年～日本女子大学家政学部、日本大学生産工学部非常勤講師

甲斐徹郎 (かい・てつろう)



1959年東京都生まれ／千葉大学文学部行動科学科卒業(社会学専攻)／マーケティング専門会社に勤務後、1995年チームネット設立／

現在、立教大学大学院、都留文科大学非常勤講師

影山知明 (かげやま・ともあき)



1973年東京都国分寺市生まれ／1997年東京大学法学部卒業後、マッキンゼー・アンド・カンパニー入社／2000年ウィルキャピタルマネジメントに参画／2006年マクスルーツを設立、「マージュ西国分寺」を企画・開設